秋田県立博物館研究報告第23号　54～45ページ　1998年３月

史料紹介　当館所蔵「赤坂文書」

鈴木　満

はじめに

当館の温故堂資料[1]及び高橋友蔵家資料[2]に石川・赤坂両氏宛の中世文書が六通ある。これらが近世佐竹氏家中赤坂氏旧蔵文書であることは、秋田県公文書館所蔵「秋田藩家蔵文書」二〇赤坂忠兵衛光康（以下「家蔵酒出文書」と略す）と比較することによって明かになる。当館所蔵の赤坂氏旧蔵文書を「赤坂文書」と呼ぼう。

小論では、「赤坂文書」とその写本をめぐる若干の問題の検討を行った後、「赤坂文書」の紹介をする。

一　原本と写本のあいだに

「赤坂文書」の写本として、「家蔵赤坂文書」と「伊頭園茶話」二五所収の石川氏古文書がある。ともに秋田県公文書館所蔵。

「家蔵赤坂文書」は、元禄・宝永期に秋田藩文書所が臨写したもの。「赤坂文書」と比較すると、字配りや字のくずし方まで原本に忠実に写している。しかし一部花押を省略したり、折紙か否かといった文書の形態には関心が払われておらず、写本の限界を見い出せる。

「伊頭園茶話」二五は、石井忠行が明治期に著したもの。「赤坂文書」と比較すると、原本に忠実な写本とはいい難い。しかし礼紙の有無、封紙の状態等の記載があり、これらの点が「家蔵赤坂文書」より優れている。

ところで「赤坂文書」は、足利満貞書状以外は巻子仕立てである。そのため闕字のほかにおそらく巻子に仕立てる過程で失われたと思われる情報が少なからずある。

一例をあげると、「赤坂文書」の佐竹義重書状三通の天地の中ほどに横の折り目がある。「赤坂文書」をはじめとする当館所蔵の折紙の文書の折り目と比較すると、文書の外ではなく、内側に折ったように見える。

ここで想起されるのは、相田二郎氏[3]が指摘された戦国期東国で見られる書状の「横ノ内折」である。相田氏によれば、佐竹氏発給文書にも「横ノ内折」の実例があるという。しかし巻子仕立てとなっている「赤坂文書」ではもとの折り方の復元は困難である。

さきにあげた写本との比較で「赤坂文書」の伝来の過程で失なわれてしまったものをあげてみると、次のようになる。

㈠温故堂資料五月十四日佐竹義重書状

①闕字を「家蔵赤坂文書」で補える。

②「家蔵赤坂文書」では本文の後、

「（封墨引影）

赤坂下総守殿　　義重」

*秋田県立博物館

とある。

③「伊頭園茶話」二五には、「奉書紙二枚重御竪文封付」の注記がある。

④「伊頭園茶話」二五には、

赤坂下
総守殿　義重

とある。

㈡温故堂資料六月十八日佐竹義宣書状

①「家蔵赤坂文書」では本文の後、

「（封墨引影）
赤坂下総守殿　義宣」

とある。

②「伊頭園茶話」二五には、「奉書紙二枚重御竪文」の注記がある。

③「伊頭園茶話」二五には、

＋裏御封

赤坂下
総守殿　義宣

とある。

右の㈠、㈡の文書には、本来封紙があったことが知られる。「伊頭園茶話」の封紙の状態を書き写している。封紙がいつ脱落したかは明らかではない。しかし写本によって原本から失われた情報を復元できる。

また㈠―③・㈡―②は、本紙と礼紙、本紙と封紙、いずれを意味するかはっきりしないが、後者であれば「二枚重」はそぐわないようなので、前者の意味に解したい。とすれば、写本によって原本から失われたものがもう一つ付け加えられたことになる。

もっとも原本によってはじめて知りうることもある。高橋友蔵家資料霜月二日佐竹義宣書状には封紙があるが、写本にはそれを欠いている[4]。

以上、原本の欠点をやや強調しすぎたきらいがあるが、原本の史料的価値がもっとも優れているのはいうまでもない。しかし写本を活用することによって、原本のもとの状態を復元することは、原本研究にとって不可欠なのである。

二　「赤坂文書」の紹介

凡例

一字体は常用漢字を用いた。

一原本の摩滅によって文字が判読しにくい場合は、□をもってその箇所をしめし、写本によって判読しうる場合には傍注を施した。

一花押は模刻せず、（花押）としめした。

一封紙の文字は上下を「」でくくり、（封紙ウハ書）と傍注した。

封目は（封墨引）と表記した。

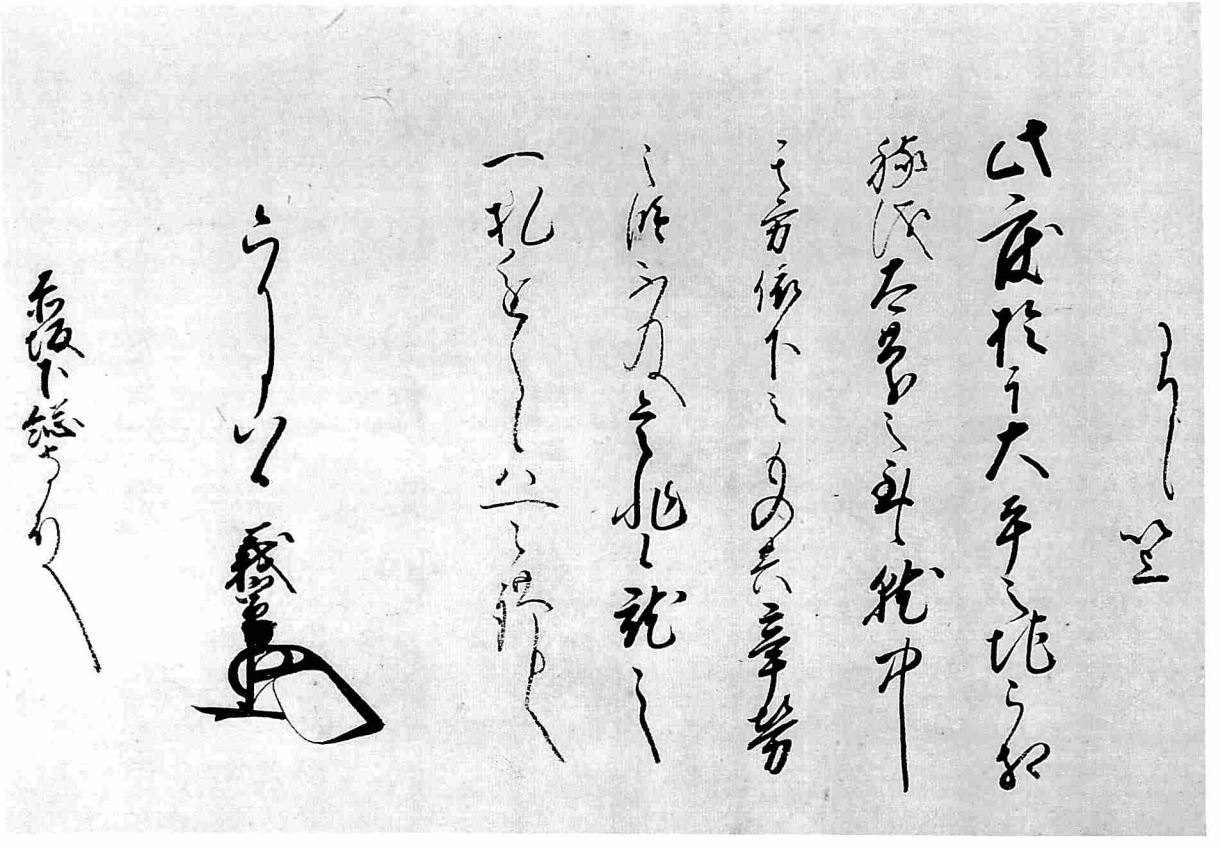
一文書の大きさを縦×横でしめした。折紙及び「横ノ内折」と思われる折り目は、その位置を天から何ミリと記した。

温故堂資料

(一)佐竹義重書状

此度玉里之地及進陳候処、
数日在陳、御辛労雖不初儀候、
無比類候、因慈受領之事□(御)
意得候、為後日一筆進之候也、
恐々謹言、
(天正十六年カ)
五月十四日　義重（花押）
赤坂下総守殿

315mm×478mm　天から157mm



(二)佐竹義宣書状

尚々以上、

此度於于大平之地、被相
嫁儀大慶之至候、就中
其方依下之もの共辛労
之段、不及是非候、就之
一礼進之候、恐々謹言、

六月十六日　義宣（花押）

赤坂下総守殿

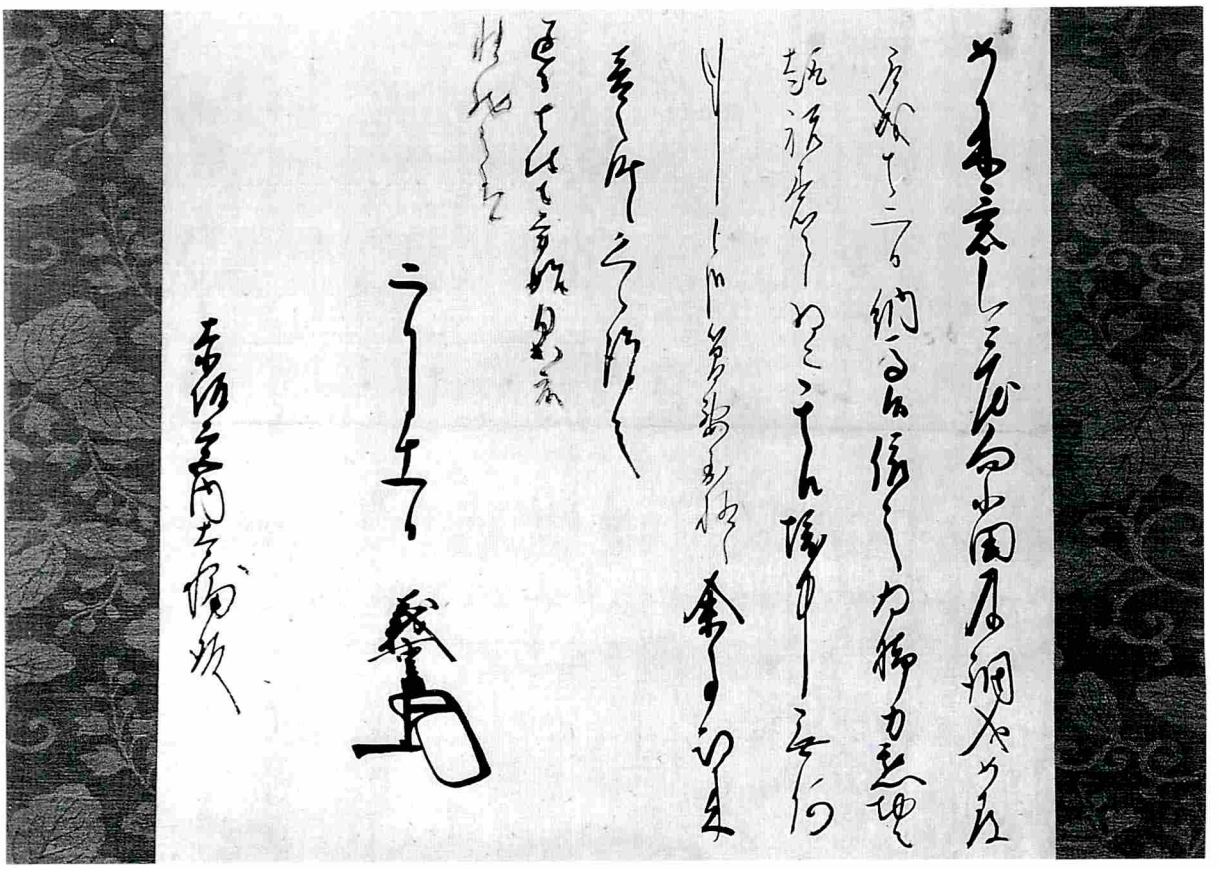
317mm×493mm

高橋友蔵家資料

㈢足利満貞感状

馳越田村取陳之
由注進之条、誠以
神妙候、謹言、
十一月十四日　〔足利満貞〕（花押）
石川長門守殿

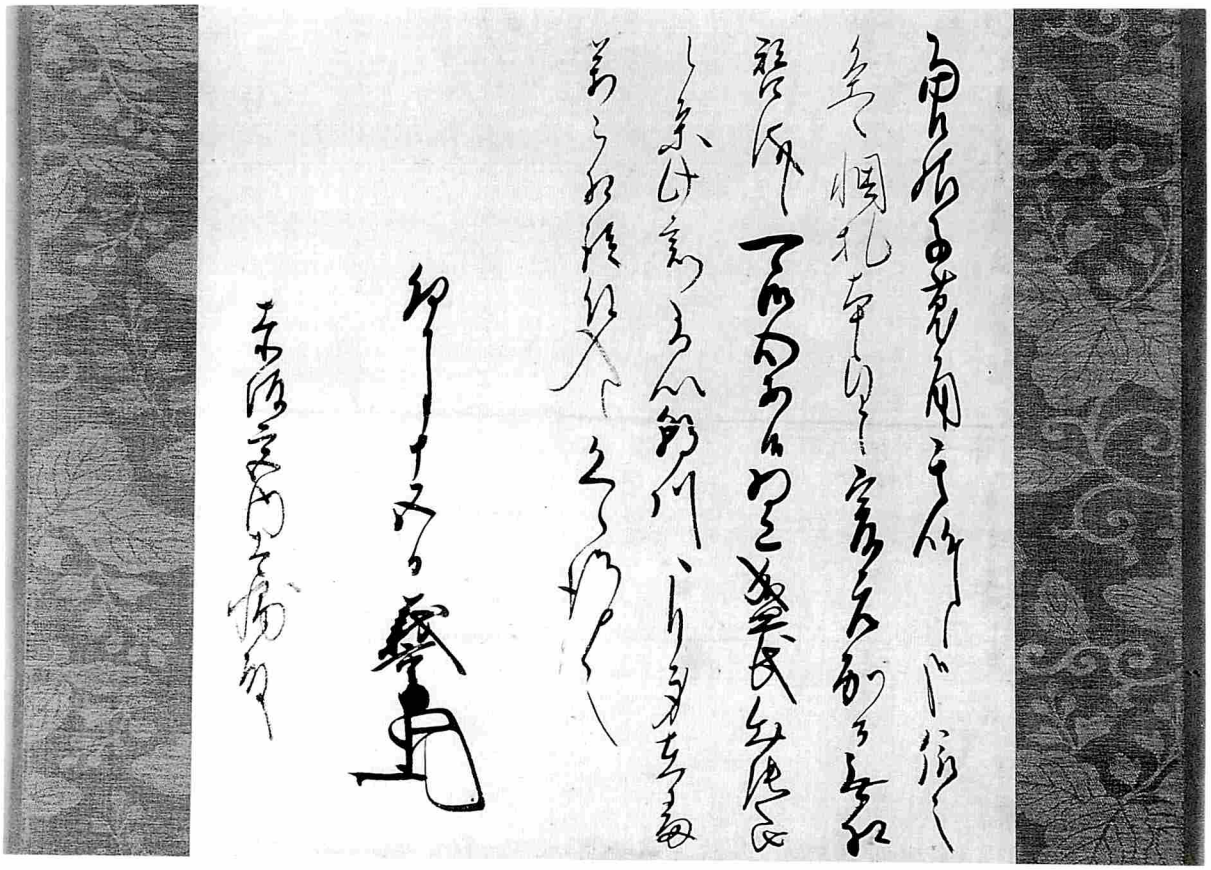
292mm×360mm



(四)佐竹義重書状

如来意、今度向小田及調義、如存
取成、去二日納馬候、依之為脚力懇切之
趣祝著ニ候、将又其口境事無何
様候哉、簡要至極候、余事期来
昔之時候、恐々謹言、
遂而去比者年始目出度、
快然之至候、
（元亀元年）二月十一日　義重（花押）
赤坂宮内太輔殿

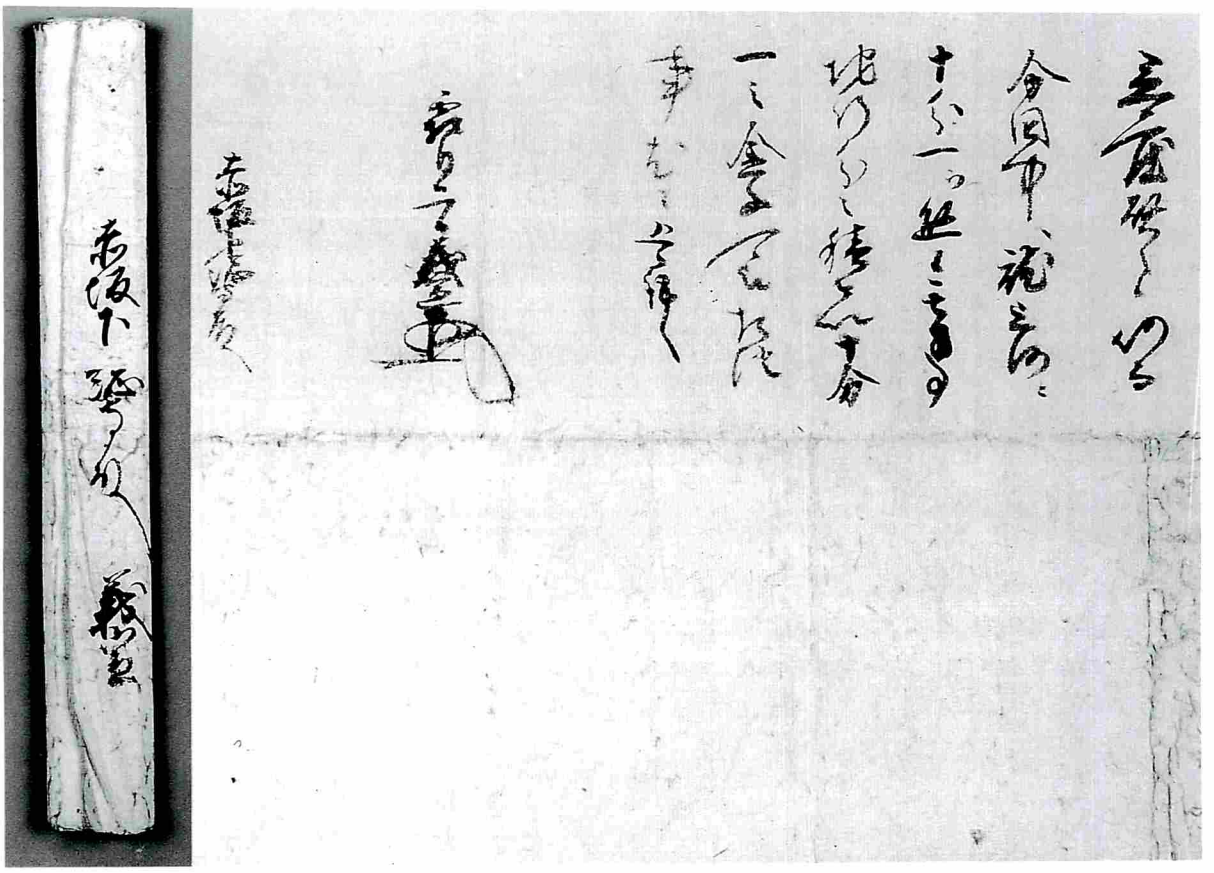
323mm×327mm　天から160mm



(五)佐竹義重書状

当口様子、蒐角其听候哉、依之
条々悃札本望候、爰元別而無相
替儀候、可御心安候、将又盛氏(芦名)出張之由
候条、此刻朝川へ自身在番、
万被相談任入候、恐々謹言
卯月十五日　義重（花押）

318㎜×298㎜　天から162㎜



(六)佐竹義宣書状

急度啓候、仍而
分国中へ就上洛ニ
十分一ヲ懸候、其方事
地(知カ)行分之積を以十分
一之金子可被相澄
事尤候、恐々謹言、
霜月二日　義宣（花押）
赤坂下総守殿

「（封墨引）」（封紙ウハ書）
赤坂下総守殿　義宣」
316mm×494mm　天から160mm

おわりに

以上で「赤坂文書」の紹介を終える。当館分を含めた赤坂氏の文書全般の考察は別の機会に譲る。

注

（1）受入記号歴コ―一五～一六。

（2）受入記号歴コ―七〇～七三。

（3）相田二郎氏「古文書料紙の横ノ内折とその封式とについて」（『相田二郎著作集一　日本古文書学の諸問題』（名著出版刊、一九七六）。

（4）写本に見えないことを理由に、他の文書の封紙が混入したと解釈もできるが、今は現状を正しいとしておく。